

もやはり国際的には醜態だと思います。

また IBM 等の装置により同時通訳をやる位の設備が必要でしょう。

しかし私はここで日本で会議を開くことについて反対または消極的な意見を述べているのではなくて、

6年後位には日本で国際会議をやる位の意気込みで今からお互いに努力したいと提案しているわけで、そのために多少とも参考になるような事を記録として留置きたいと考えている次第であります。

(1960年9月)

Weibull 教授のこと

近藤次郎

日本を出がけにオペレーションズ・リサーチ学会から依頼を受けたので、スウェーデン到着後早速近く来日を噂される Weibull 教授をさがすことにした。Waloddi Weibull 教授はストックホルム工科大学(KTH)の物理学科の応用物理講座の教授である。いや“あった”といった方が正しい。いろいろ調べてわかったのは、彼が1953年6月1日に退官して今は南の方の Brösarps というところに隠退しているということであった。彼はもともとスウェーデンの重工業 Bofors 社の技師で、1941年この会社の経済的援助で KTH に応用物理学講座が創立され、その教授になった。従って教授になってからの業績も Bofors の研究室で行ったものが多いが、測定器、衝撃波、デトネーション、金属の疲労破壊等の測定に関するものが含まれている。

彼の住んでいるところはストックホルムから600軒近くも離れていて、ちょっと会いに行くわけにもいかないので手紙で連絡して、日本へ行かれる前にストックホルムへ来られるならお会いしたい旨を伝えたところ、返事が来て“自分は1929年世界動力会議と国際機関会議(World Power Conference and World Engineering Congress)が東京で会ったとき日本に行って楽しい一ヵ月を過ぎた。この美しい国にもう一度行ってみたいと思っている。私は貴方がストックホルムにいる間に上京する機会はないが多分何処かでお会いできるであろう。私は明朝行ってジュネーブに行くが一週間程で帰って来る。4月の初めに私はアメリカへ数週間の予定で行くつもりで帰りは直接にジュネーブに向かい、そこで当分落着く予定である。5月の15日から19日までパリにあり、9月にはイギリスにいる予定である。”と書いてきた。この大学は65歳が定年であるからもう72~3歳と思われるが仲々の元気で、引退していて恩給も年金も十分にある筈なのに何でそんなに忙しく旅行して歩いているのかわからない。航空に関する統計の論文をジュネーブから帰ったら送ってあげようと言ってきたので楽しみにしている。

スウェーデン人は出好きな国民で家でじっとしているのは嫌いな性分と見える。今年は3月31日から4月4日にかけてイースターの休暇があるが、スウェーデン人は昨年のクリスマスの頃からもう楽しみにして旅行の申込みをしている。従って、この期間は何処も満員ということであったが、まだ毎日の広告に、楽しい休暇にベルリン、ハンブルグ、パリ、イタリーへと旅行社の広告が出ているが、ストックホルムから車中または船中2泊、旅館4泊位で200クローネ(1万4千円)から飛行機による500クローネ(3万5千円)位の団体旅行の広告が新聞にいっぱい出ている。大学新卒の工学士が1,700クローネ位貰える国だからちょっとした小遣いの節約で気軽にヨーロッパの各地へ旅行できる。ちょうど日本という東京から北海道や九州旅行よりは手軽でまあ関西旅行といった程度である。もっとも日本のように奥さんは留守番で御主人だけ団体慰安旅行というわけには行かないから家族持ちはこの倍額程度の出費は覚悟なくてはならない。これだけでなく7月8月は商店は勿論、官庁や郵便局などでも休むか営業しても昼迄でこの間みんな休暇をとって遠くは南仏、近くも南の海岸などに旅行する。Vikingの血が多少は残っているらしい。従って Weibull さんも仕事と慰安の半々に旅行されているのかも知れない。また何かあったら通信するとしてこの“Weibull”に会わざる記によって約束を果たしたことにしたい。(3月22日記)